

自然素材を手づくりする体験は 子供たちの記憶に残り 主体性を築くよりどころになっていくのだ

「デジタルで制作された玩具は刺激が強く、子供の成長にふさわしくない要素もありますが、自然の素材で手作りした玩具は、五感を働かせ、自分が主体となって遊べます」と、風づくりを教えてくれる女性の講師は語る。

十月の末、浅舞公民館蛭野分館で行われた自然素材ワークショップ「つぎなにつくろう」に、娘と孫の冬馬くん(七歳)を連れて参加した。ゲーム機やアイフォンに浸って遊ぶのが日常となっている孫に、アナログの感覚を体験させたいとやってきたのだ。このイベントを主催している佐藤茅茸店の偉仁さんは、熟練した腕前の茅茸職人であり、各地のワークショップに招かれ、共

催もしている。子供たちに「手づくりの楽しさを教えたい」と、十年ほど前から地元の会場で、地元の人たちの協力を得ながらワークショップを続けてきたのだ。

コロナ禍で昨年は中止したが、予約した参加者に絞られた会場は、九つのユニークな体験メニューが用意されていた。「ててて風をつくろう」に参加した私たちは、大きなスクリーンを見つめながら風づくりをしたが、その様子は、福島県石川町と新潟県三条市でも行われている風づくり会場とリモート中継されていたのだ。

出来上がったタテ、ヨコ、四十五センチくらいの風に、冬馬くんが可愛い絵を描いてからグラウンドに移動した。西の風三メートル

ルの恵まれた天候は、青空に幾つも風が泳ぐ絶景を作り出した。

冬馬くんの風糸を追っていくと、上空の一番高いところで泳いでいたのだ。嬉しくてどうしようもない、という表情でたたずんでいる。紙を切り、ノリづけをして、糸結びの後に大好きな絵を描いた風が、五十メートルも離れた上空で、揺れている光景に感動しているのだ。

「つぎなにつくろう」の体験メニューとスタッフの数は、充実しながら成長している。デジタル技術の進化する時代に、自然素材を手づくりする体験は、子供たちの記憶に残り、主体性を築くよりどころになっていくのだ。